重なる在処

玖鴎燎助

四月。厳しかった冬の寒さは、春の麗らかさへと様変わりし、桜の花が街を彩るように咲き誇る頃。

世間の人々は年度の始まりとあってか、新しい生活の準備に追われて忙しない日々を送っている。新しい学校への期待と不安に胸を膨らませる人、社会人としての第一歩を踏み出そうとしている人、他にも様々な思いが巡っているだろう。十人十色、人の数だけ期待があり、人の数だけ希望がある。

穏やかな日差しと暖かな空気。春という季節は、まさに新しく巡る日々へ思いを馳せるに相応しい季節と言えるだろう。

「うっせーな、勝手に入ってくんじゃねぇぞ、ババァ！」

――そんな『春がどんな季節か』などという高説は俺には縁もゆかりもないものだが。

窓の外にはソメイヨシノ。目で見えるほどはっきりと分かる麗らかな日差し。しかしながら部屋の中でパソコンのモニターとにらめっこするしか予定のない俺には、全く関係がない。

三年前の高校卒業の時、特に進路も考えていなかった俺は、一日であろうと勉強したくなかったし、かといって働くつもりも毛頭無かった。そんな人間が辿る筋道というのは得てして同じもの。俺もその例に漏れることなく、立派な無職になっている。

職に就かずとも、実家にいればなんの問題ない。電気も水道もガスも、勿論ネット回線だってある。雨風をしのげる家もあれば、食事だって用意される。欲しいものがあっても、ネット通販か母親を活用すれば家から一歩も出ることなく手に入る。

いつぞやのニュースで見た『働いたら負けだと思っている』とは誰の言葉だっただろうか。俺もその言葉に同意である。このご時世、まともに働いても『百害あって一利なし』だ。働かずに暮らしていけるのならば、働く必要はまったくない。

今日も今日とて、母親の入室を難なく回避した俺は、部屋の前から人の気配が消えたのを確認すると、必要最低限だけ扉を開き、本日の昼食を招き入れた。

「……ったく、昼飯もカレーかよ。どんだけカレー作るんだよ、あのババァ」

お盆に載せられていたのは、昨日の夕食と同じカレー。トンカツを乗せてアレンジしたつもりなのだろうか。何をどうしようと、カレーはカレーに違いない。とはいいつつも、そんなことを言って食料の支給を絶たれては困るので、そそくさと机へ運んでいく。

カツカレーを掻き込みながら、ネットゲームへログインする。相当な金額を費やしただけあって、今やゲームのランキングでは何ヶ月も連続で一位を獲るほどの熟練者になっている。ゲーム内では俺の名前を知らない人間がいないほどだ。

早速いつものメンバーに、一緒にゲームをしようと招集をかける。例え顔を知らない相手でも、どんなに遠くに離れた人間でも、今や指を少し動かすだけでメッセージを送り合うことが出来る。ともすれば相手の顔を見ながら直接会話もできるのだ。ネットの利便性は、距離や時間に左右されない、まさに次世代のコミュニケーションツールである。

カツカレーを綺麗に平らげる。それからどれだけ待とうとも、一向にメンバーが集まる気配がない。一体どうしたのかと思っていると、誘った幾人かの内一人から返信のメッセージが来た。

『すいません。今日は大学の入学式が朝からあるので、また夜に集まりましょう』

驚天動地だ。まさかメンバーの中に大学生がいるとは思わなかった。

思わず二度、三度と文面に目を通してしまった。想像以上に動揺している自分を、どうにかして落ち着けていると、更にもう一通のメッセージがメンバーから届いた。

『今日は入社式があるので、いけそうにありません。ゴメンね！』

震天動地だ。よもやメンバーの中に社会人がいるとは思わなかった。

裏切られたような気持ちになりながらも、更に届く何通かのメッセージに目を通していく。どれもこれも誘いを断るものばかりで、その理由の多くが『入学式』や『入社式』だった。腹立たしいことこの上ない。つい先日までは朝から晩まで誰かとゲームをしていたのに、今日に限っては一人らしい。

「……ま、まぁ、俺はプロだし、別に一人でも問題ないけどな。逆に同情するよ、大学や会社に通わなきゃいけなくなるんだからな。俺みたいに毎日遊んで暮らせなくなるんだろうなぁ」

届いた断りのメッセージを片っ端から削除すると、そのまま一人だけでゲームを開始した。

その日のゲームは、何故か全く面白くなく、一時間ほどでログアウトし、ベッドに倒れ込んでそのまま眠ってしまった。

◆◆◆

夕飯を済ませた俺は、もう一度ゲームを起動する気にもなれず、適当にお気に入りのサイトを見て回っていた。

正直、入学式や入社式で裏切られたことは今回が初めてではない。高校を卒業して三年ほどになるが、その間何度も同じような裏切りを経験している。その度にメンバーを取っ替え引っ替えなので、この三年間続いているメンバーは一人としていない。

偶にゲーム内ですれ違いもするが、気付かないふりをしている。向こうも気付いていないの

か、あるいは無視しているのか、話しかけられたことはない。
そもそも、学生時代から人間関係というのは苦手だった。誰かと話すのも、食事をするのも、相手の顔を窺いながら、探り探りで行っている。そう思ってしまうのが嫌で他人と距離を置いていた。
すると、一人でいる時にクラス中に響く笑い声が、こちらを嘲笑する声に聞こえて、学校は不快な場所になっていた。
それを寂しいと思わなかった俺が異常だったのか、正常だったのかは今では分からない。ただ、実生活でまともな交友関係の無かった俺は、結局ネットの世界でもまともに人と付き合うことが出来ずにいた。
次はどんな人間をメンバーに勧誘しようかと考えていると、妙なポップアップ広告が出てきた。小さなブラウザウィンドウで出てくる企業の広告である。
変なところでもクリックしたかと思いながら、取り敢えず広告に目を通してみる。
『『自分と向き合ってみませんか』って……なんだこれ？」
よく見かけるワンクリック詐欺のような怪しさもなければ、企業名も見あたらない。ただ真っ白な背景に黒い文字があるだけの、非常にシンプルな広告だ。いや、広告としてすら機能していない、ただのリンクである。
閲覧していたのも、いつも見ているお気に入りのサイトで、こんなポップアップは今まで出てきたことがない。
「気になるな、これ。どこに繋がってるんだ？」
シンプルで、胡散臭さどころか何かを宣伝しようという雰囲気もない。それが逆に好奇心を掻き立てる。自然とその広告をクリックした。
瞬間、目の前のモニターが暗転する。電源は点いたまま、モニターから一瞬にして映像が消えたのだ。
「え？　なんだこれ、ウイルスか？」
適当にマウスを動かしてみたり、クリックを繰り返してみたり、キーボードを適当に叩いてみたりもしたが、一向に反応がない。思わず、モニターを叩くなどという古典的な手段も試したが、一向に動く気配がない。
偶然起きたモニターの故障かと思ったが、その杞憂はすぐに無くなった。モニターは再び映像を流し始めた。先程とは違う映像を。
そこには、画面いっぱいに誰かの部屋が映し出された。本棚があり、ベッドがあり、言い訳程度の小さな机がある。特に個性のない、どこにでもあるような部屋の光景だ。
まるで誰かの部屋を撮っているみたいだ。だが、その部屋の映像には既視感がある。まるでいつも見ているような部屋だ、そう思った瞬間、バネ仕掛けのように首をひねり、自分の部屋を確認する。

「同じだ……」
肩越しに見える自分の部屋。それはモニターに映っている映像と同じだった。家具の配置や壁の色、扉の位置まで正確に一致している。
盗撮か何かかと思い、もう一度モニターに向き直ると、映っている映像に変化があった。モニターの前に、誰かの顔がある。短く切った清潔そうな黒髪に切れ長の目。それも部屋と同様に、既視感に襲われる顔だった。
「……俺？」
細部は違うが、モニターに映っている顔は、どう見ても自分の顔だった。
盗撮か何かかと思いモニターの前で手を振ってみるが、モニターの向こうの俺は動く様子がない。そもそも、映像から考えてカメラの位置はモニターかモニター上部になるのだが、そんなところにカメラはない。
『あれ？　僕がいる』
ヘッドホンから俺の声がする。モニターの向こうの俺が発したらしい。ということは、向こうには俺の映像が映っているのだろうか。
「もしもし、聞こえるか？」
馬鹿らしいとは思いながらも、試しにモニターの向こうの俺に話しかけてみる。そもそも俺と会話なんてできるわけがない。録画か何かだろう。
それでも好奇心に任せてマイクを通して声を掛けると、向こうは驚いたように目を見開き、そして怪訝そうな目をしながら、向こうもマイクで話しかけてきた。
『もしかして……見えてる？』
なんと会話が成立してしまった。ということは、どうやらこの映像は録画ではないらしい。
「ばっちり見えてる。俺は見えてるか？」
『見えてるよ。おかしいな、カメラなんて付けてないのに』
思った通りだ。ここまで部屋の環境が似ているなら、向こうもパソコン用のカメラはないと思っていた。それはそれで、より一層不思議なものだ。お互いにカメラがないにも関わらず、お互いの姿を映像として見ているのだから。
向こうはパソコンの周辺を見回している。恐らくカメラか何かを探しているのだろう。俺と同じなら、パソコンの周りは綺麗に片付いているはずだ。案の定、何も見つからなかったらしく、モニターへ視線を戻してきた。
『どうなってるんだろう、ウイルスか何かかな……』
「……ウイルスかどうかは分からねぇけど、原因なら一つ心当たりがある」
『何？』
「妙なポップアップ広告だ。それをクリックしたらこうなった」
突然出てきた謎のポップアップウィンドウ。あれをクリックした途端にモニターが暗転し、

今の映像に切り替わったのだ。ウイルスにせよ故障にせよ、原因はきっとあの広告にあるはずだ。

そう言うと、向こうはまた驚いたように目を見開いた。随分と分かりやすく表情が変わるものだ。実際の俺もそうなのだろうか、と疑問に思う。

『君もクリックしたんだ。そっか、じゃあ間違いなくそれが原因だろうね』

君も、ということはモニターの向こうの人間もクリックしたらしい。不用心なことだ。もし本当にウイルスでも出てきたらどうするつもりだったのだろうか。俺が言える立場ではないが。

「とにかく、何かの間違いで繋がっただけだろう。電源を切って再起動すれば、元に戻るさ」

そう言って、モニターの横に置いてあるパソコン本体の電源ボタンを押す。しかし、全く反応がなく、モニターにも変化がない。そもそも、起動中であるはずの本体から、駆動音が全くしないのも不自然だ。

何度も電源ボタンを押すが、一向に反応がない。壊れるのを覚悟でプラグを引き抜こうとしたとき、再びヘッドホンから声がした。

『無駄だよ。僕も試したけど駄目だった。そもそも、本体が起動してないみたいだ』

モニターへ視線を戻す。向こうはどうやらこの状況を受け容れているらしい。

「ということは、モニターだけ動いてるのか？　そんな無茶な」

そもそもモニターはただ映像を映し出すだけの出力機械だ。パソコンを視覚的に操作しやすくするためのものでしかない。それが単体で映像を映し出しているなんて不自然だ。

『無茶だけど事実だよ。詳しいことは分からないけれど、どうやらこのモニターで僕と君の映像が繋がってしまったみたいだ。モニターの電源も切れないしね』

あり得ない、とは思うものの、実際に目の前にはカメラのないモニター同士が、パソコン本体を介さずに映像を出力している。しかもヘッドホンとマイクまで機能している。一体あのポップアップウィンドウにどんな仕掛けがあったのだろうか。

キーボードを適当に叩いてみたり、マウスを動かしてみたりもするが、反応はない。目の前の人間と会話をする以外の用途が無くなっているらしい。

『取り敢えず自己紹介でもしておこうか。僕の名前は植田直也。君は？』

落ち着いた様子で自己紹介などを始めた。呑気なのか冷静なのか分からない。が、そんなことよりも気になったことがある。今、こいつはなんと名乗ったか。

「もう一回……もう一回、名前を言ってくれるか？」

『？　僕の名前は植田直也だけど、それがどうかした？』

聞き間違いなどではない。間違いなくモニターの向こうの人間は『植田直也』と名乗った。

『僕の名前に何かある？』

「……一緒だ」

『え？』

「俺の名前も、植田直也だよ」
勘違いだと思っていた。会話が成立した時点で、モニターに映っている人間は別人だと思っていた。だが、向こうが名乗った名前は自分のそれと全く一緒だ。広告の文字が、ふと脳裏を過ぎった。
『……そうか。まさかとは思ったけど、やっぱり僕たちは――』
「待て、待ってくれ。何かの間違いだ。同姓同名で顔がよく似た赤の他人ってこともあり得るだろ」
そうだ、同一人物なんてことはあり得ない。モニターを通して会話している人間が、自分と同じであるはずがない。
「質問するぞ。年齢は？」
『二十五歳だよ』
「出身は？」
『大阪だよ。育ちも大阪』
「えっと、母親の名前は？」
『幸子。ちなみに父親は正平だ』
「……俺は小学生の時犬を飼ってた。名前は？」
『コロスケ』
「……一緒じゃねぇか」
全て一緒だった。その上容姿も似ているとあれば、認めたくはないが認めざるを得ないだろう。しかし、似ている人間ならまだしも、同一人物が現実にいるなんて、まるで――
『ここまで同じだと、まるで“ドッペルゲンガー”みたいだね』
――そう、まるで“ドッペルゲンガー”だ。
ドッペルゲンガーとは、自分と瓜二つの幽霊のことで、死期が近いと出会うことが多いということから、逆説的に『出会うと死ぬ』と言われている都市伝説のようなものだ。過去にも著名な人間がこのドッペルゲンガーを見た、という記録が残っているらしい。
他にも、ドッペルゲンガーは周りの人間と会話はしない、とか、本人に縁のある場所に現れる、といった特徴もあるらしい。『周りの人間』というのが本人も含むのかどうかは俺も分からないが、それ以外に説明が付かない。
「もしドッペルゲンガーなら、お前が俺の分身ってことになるが」
『僕からしたら君の方がドッペルゲンガーだけどね。死んだ方が本物ってことかな？』
縁起でもないことを言うものだ。しかし、ここまで流暢に話をする人間が果たして幽霊なのだろうか。俺よりもよほど話すのが上手い。それに言葉遣いにも多少の差異がある。分身ならその辺りも同じで然るべきだと思うのだが。
『ところで仕事は何してるの？　こんな遅い時間にパソコンしてると明日に響かない？』

「む。仕事か……」
まずい。いくら自分の分身とはいえ、「無職で引きこもりをしています」なんてことを言えるはずがない。
「仕事は……夜勤の多い仕事なんだ。だから朝は寝てることが多くて、逆にこういう時間しか自由な時間がなくてな」
思いついてしまえば、嘘は案外簡単に口をついて出てきた。抵抗があるのは言葉にする寸前の本当に一瞬だけ。発してしまえば、あとは流れるように言葉になる。こういうときだけよく回る自分の頭に腹が立つ。
『夜の仕事なんだ。大変？』
「大変だぜ。入社したての頃はそうでもなかったんだけど、二年目ぐらいから、社内じゃ俺が仕事できる方の人間になっててさ。上司の期待が重いっていうか、その期待のせいで仕事を多く任されるっていうか。おかげで帰る時間も遅いしな」
一つ嘘をつくと、それを取り繕うためにまた嘘をつき、その矛盾を隠すためにまた嘘をつく。そうして小さな嘘がいつか大きな嘘に変わってしまうのだ。厄介なことに、それを相手に疑わせないようにせっせと頭を回せるのが人間である。
普段の俺なら、久しぶりの会話に頭がパンクして、まともに喋ることもできなかっただろう。それでもこうして延々と嘘を吐き続けられるのは、相手が自分の分身だからか、或いは相手がモニター越しだけの関係だからか。どちらにせよ、嘘をつく時だけ能弁なことへの自己嫌悪で消えてしまいたくなる。
一通り嘘をつき終える。取り敢えずこいつに対する俺のキャラクターがある程度確定してしまった。自分とは真逆だが。
「で、そういうお前はどうなんだよ。どんな仕事してるんだ？」
これ以上詳しいことを質問されると、ボロが出てしまうと思い、なんとか話を逸らそうと逆に質問を返した。モニターの向こうのそいつは、少しの逡巡の後、躊躇いながら口を開いた。
『僕は……仕事はしてない。ずっと家にいるんだ』
視線を逸らしながらそう答えた。よくよく考えれば、相手は自分の分身なのだから、わざわざ嘘をつく必要もなかったのではないだろうか。現に向こうも自分と同じ境遇のようだし、見栄を張ったのは無駄だったようだ。
そんな後悔も先には立たない。今更訂正するのも余計に恥ずかしいし、このまま自分は嘘をつき続けることにしよう。
「へぇ、無職で引きこもりか。そんなんで親は何も言わないのか？」
自分のことを棚に上げて、無神経な質問をする。自分で自分の悪口を言っているような感覚だ。被虐的で心が痛む。
そんなことは気にしないのか、何でもないという様に質問に答える

『そうだな……父さんは割とうるさかったけど、母さんは何も言わなかったかな。昔から僕のことについては何も言わない性格だったから』
一緒だ。今まで俺が過ごしてきた境遇と同じらしい。
俺が進路を決めないと分かると、親父は胸倉を掴んで説教をしてきた。それ以来、親父とは一切口をきいていないし、向こうも向こうで、俺なんていないとでもいうかのように無視をしている。
一方の母親は、進路を決めずに卒業した俺に何も言わなかった。これが無関心ではなく過保護からくることは俺も分かっている。その優しさを、俺は利用しているのだ。
相手の答えで、一気に自己嫌悪が膨れあがった。こいつに質問をすると、自分自身が心を抉られる気分だ。『自分と向き合う』ってそういうことなのか。
「そうか。まあいいや、俺とお前にも微妙に違うところがあるって分かっただけでも僥倖だ」
『それもそうだね。おかげでドッペルゲンガーなんじゃないかって疑念も、少しだけだけど晴れてきたし』
本当は俺も引きこもりの無職だって事を知らないこいつは、呑気にそう言った。
「疲れたし、今日はもう寝ようぜ。寝て覚めたら全部元に戻ってるかも知れねぇ」
『同感だね。それじゃあ一応お別れの挨拶でもしておこうか』
「だな。それじゃ、サヨナラ」
『ああ、さようなら』
それだけ告げると、手近にあったタオルケットをモニターにかけて、マイクのスイッチを切った。いくら自分の分身でも、寝ている姿を見られるのは嫌だからだ。
そうして部屋の灯りを消すと、ベッドの中に潜り込んだ。奇妙な出来事だったが、変化のない日常からほんの少しだけ外れたその出来事を、疑問に思いながらも楽しんだことは事実だ。
「二度とあって欲しくないけどな……」
そう祈りながら、ゆっくりと眠りに就いた。

◆◆◆

『おはよう』
「……あぁ」寝ぼけ眼を擦りながら、モニター画面に向けて呟いた「……おはよう」
朝。といっても時刻はもうすぐ十二時を回ろうという頃だが、午前中なのでぎりぎり朝と言えるだろう。目を覚ました俺は、いつもの癖でパソコン本体の電源ボタンを押し、モニターに掛かっていたタオルケットを取った。
そこには画面を覗き込む俺の顔があり、寝ぼけながらも昨日の出来事を思い出し、挨拶をしたのがつい先程である。

『夜勤なのに早起きなんだね。今日は何時に出るの？』
「……今日は休みだよ。そうじゃなけりゃ、こんなに早く起きない」
自分の設定を思い出しながら、返答する。取り敢えず俺の休みはこれから毎週水曜日ということになった。週休二日にしてもいいが、覚えるのが億劫なのでやめておく。
もう一度モニターにタオルケットを掛け直すと、服を着替えて、脱いだ服を部屋の外に置いておく。洗濯しておけ、という合図である。
あくびをかみ殺しながら、棚からノートパソコンを取り出す。昨日の状況が続いているということは、あちらのパソコンはネットに繋げない状況だろう。非常用に置いておいたノートパソコンが、今回は役に立ちそうである。
『おーい、何か話をしようよー』
ヘッドホンから音が漏れてくる。向こうは暇を持て余しているらしいが、こちらは急を要する用事がある。裏切り者ではないゲームのメンバーに連絡を入れなければならないのだ。
モニターの向こう側から頻りに会話を催促されながら、手早くメッセージを送る。今のところパソコンが復旧する様子がないので、オンラインゲームができないのだ。勿論ノートパソコンからも接続はできるが、如何せん性能の違いがあるため、ノートパソコンでは快適な環境を整えられないのだ。
暫くの間ゲームは休む旨を伝え、うるさい催促に仕方なく従うことにした。
「はいはい、話してやるから」
『やっときたよ。何してたんだい？』
「メール。色々と連絡が忙しいんだよ」
投げやりに答える。正直、こいつほどこの状況に慣れてはいないのだ。目の前に自分と同じ人間がいて、そいつと会話していることが、気持ちが悪くてしょうがない。
例えば、いつの間に持ってきたのか、モニターの前でカツカレーをおいしそうに食べている姿など、見ているだけで食欲をなくすほどだ。何が悲しくて、自分の食事風景を見なければならないのか。
気が滅入りながらモニターの向こうのそいつを眺めていると、カツカレーを食べる手を止めた。自然と視線が合い、そして向こうは何かを察したようにカツカレーをモニターの前に差し出す。
『……羨ましい？』
「羨ましくない！」
何を勘違いしたのか、見当違いな質問をしてくる。こちらはつい昨日食べたばかりである。それに何故モニターの向こうの食事に羨望を抱くのか。そんなものは、店の前のディスプレイに涎を垂らすようなものだ。
『ふぅん、羨ましくないんだ』

残念そうに目を伏せながら食事を再開する。
「……好きなのか？その……カツカレー」
その顔に、何やらいたたまれない気持ちになり、手持ち無沙汰なことも手伝ってか、そんな質問を投げかけた。
『ん？　大好きだよ、カツカレー。君は？』
「……別に、嫌いじゃない」
素っ気なく返す。こんなところでも共通点が見つかったことが、筆舌に尽くし難い気持ちになる。勿論、嬉しいからではない。断じて。
油断しかけたその時、背後からドアをノックする音が聞こえた。時間は正午過ぎ、母親が食事を持ってきたのだろう。
急いでモニターにタオルケットを掛け、マイクのスイッチを切る。ヘッドホンを外すと、回りかけたドアノブを急いで押さえ、ドアに体重を掛ける。この聖域を、母親に踏み荒らされる訳にはいかないし、何より今モニターを見られるのは非常にまずい。
「おい、勝手に入ろうとするんじゃねぇ！」
「で、でも、今、話し声が聞こえたわよ。誰か、そこにいるの？」
母はパソコンには詳しくない。電話がないこの部屋から話し声が聞こえることが不思議でならないのだろう。アナログな人間にパソコンの説明をすることほど疲れることはない。だから詳しい説明をする気はなかった。
「誰もいねぇよ！　それより飯は持ってきたか？」
「あ、あるわよ。また、ドアの前に置いておけば、いいの？」
「それでいいんだよ。勝手に入るんじゃねぇぞ！」
気配が去っていく。今日も難なく母親の入室を回避した。だが、いつも以上に心が痛んだ。昨日、モニターの向こうのあいつとの問答で、母親の気持ちを再確認してしまったからだろうか。
「こんな息子にも、まだ優しくしてくれるんだな……」
ドアを開く。そこには、昨日と同じカツカレーが置いてあった。あいつが食べていたのだから、こっちの世界でも同じメニューが出てくるのは当然と言えば当然なのだろう。
湯気の立つカツカレーを眺めながら、昔、まだ俺が小さかった時のことを思い出した。
今の家よりも狭いアパートの一室。母の作ったカツカレーを、家族仲良く食べていた頃。母のカツカレーが世界で一番おいしいと疑わなかった頃。あの頃の俺は、きっと自慢の息子に違いなかった。母も父も、そして俺も、三人が食卓を囲んで笑顔だった。今の父と母は、果たしてどんな顔で笑うのだろうか。
「……くそっ」
廊下の奥、母が消えていっただろう階段を眺めながら、ゆっくりとドアを閉めた。

『どうしたの？　急にモニター隠して。マイクも切ってただろ？』
「……母さんが来たんだよ。今のモニターを見られたら困るだろ？」
『そっか。それもそうだね』
納得して、スプーンを動かしながらこちらの皿を見た。
『ありゃ、君もカツカレー？』
どうやら食事も同じであることに、驚きながらも予測していたかのような表情をする。その妙に幼さの残る表情に、昔の俺を思い浮かべた。
『変な顔してるね。嫌なことでもあった？』
「……別に。変なこと思い出しただけだよ」
それだけ答えると、モニターにタオルケットを掛け直し、カツカレーを食べる。誰かに見られながら食事をするには、もう少しリハビリが必要だ。ヘッドホンから流れてくる非難は馬耳東風に聞き流す。
その日のカツカレーは、在りし日の食卓を思い起こさせた。

◆◆◆

『おかえり』
「ん、ただいま」
モニターが別の俺と繋がってから数日が過ぎた。未だパソコンは復旧する気配を見せず、このモニター越しの奇妙な関係も続いていた。
時刻は朝の六時。そろそろ家の人間が起き出す時間だ。夜勤の仕事をしていると騙しているため、この時間になるまでモニターからタオルケットは取れないし、マイクのスイッチも入れてはいけない。タオルケットはモニターにセロテープで固定して、暖簾のようにめくれるようにしてある。これならば、緊急の時にすぐモニターを隠せるのだ。
『この挨拶も随分馴染んできたね』
「馴染まねぇよ。一体どんな感覚してんだ……」
自分自身に挨拶されるのも慣れないし、部屋すら出ていないのにおかえりと言われるのも全くもって馴染めない。後者は俺に責任があるが。
とは言うものの、会話自体に違和感や嫌悪感が無くなってきたことは事実だ。まるで数年来の友人のように接することが出来る。こんな風に人と話すのは、実に数年ぶりだ。
会話といえば、ここ数年は味気のない文字だけのもので、実の親ともまともな会話は成立していない。唯一声でやり取りをする母親へは、口を開けば罵詈雑言ばかり。こうして中身もなにもない、それでも味わいのある会話をするのは、本当に久しぶりだ。
『どうしたの？　なんだか嬉しそうな顔だね』

「……俺が？」
『他に誰がいるんだよ』
呆れたようにモニターの向こうのあいつが言う。見ていた人間が言うのだから、きっと俺はついさっき笑っていたのだろう。
確かに、こいつと話しているときは、何故だか妙に気分が浮かれるのは事実だ。今までゲームで得ていた、達成感や充実感とは違った、穏やかで緩やかな幸福感とでもいうのだろうか。だとすれば、人と話すことが、いつの間にか俺にとっては嬉しいことになっているのだろう。
だが、こんな恥ずかしいこと、目の前のこいつには死んでも言ってやらない。
「……別に、嬉しい事なんてないけど」
『本当かなぁ』
いやに勘繰る態度だ。昔の俺がこんなことを他人にされていたら、きっと無遠慮に悪辣な言葉を吐いていただろう。こいつと、というよりは誰かしらとの会話のおかげで、性格が丸くなったのかも知れない。
訝しむような視線を受けながら、家人の寝る間に台所から拝借したパンを齧る。昼まで寝ていることが多く、朝食は準備するなと母親には言ってあるため、珍しく朝起きた時は自分で調達するしかないのだ。
こうしてこいつと会話するようになってからは、朝帰りであることを見せねばならないため、わざわざ日の出前に起きているのだ。仕事をしていないと明かしてしまえば、こんな面倒臭いことはしなくてもいいのだろうが、羞恥心と自尊心が邪魔をする。
空いている小腹を満たしてから、ふと気になったことを確認することにした。
「そういえば、お前友達はいるのか？」
『あれ、そういうこと聞くの禁止したのは君じゃなかったっけ？』
非難する色はなく、ただ単に疑問に思って口にしたらしい。
モニターが繋がった翌日に、過ごしている環境などはお互いに聞かないことを約束し合っていた。こちらの嘘がばれてしまう可能性があり、それを防ぎたかったのも理由の一つだが、本当の理由は別にある。
こいつに質問をすると、基本的に自分の心を抉るような答えが返ってくるのだ。今の自分に罪悪感があるからなのか、ただ単に昔のことを思い出して不快に思っているだけなのかはわからないが、少なくとも気分がよくなるようなことはほとんど無かった。
ただ、こいつの交友関係だけがずっと気になっていたのだ。
言葉の端々に、相手のことを気遣うような雰囲気があり、流暢に言葉が出てくる。会話慣れしているようなのだが、もし人間関係が俺と一緒ならば、そんなことは絶対にあり得ない。
学生の頃から、俺には終ぞ友人というものがいなかった。小学生の頃は割といたのだが、中学校に進学した後から、そういった交友関係が煩わしくなってしまったのだ。だから、友達と

いうものが、俺にはよく分からなかった。
しかし、こいつは違う、という変な確信めいたものがあった。俺とは違う何かを感じた。聞いて良いのかどうかは分からないが、その確信めいたものがずっと頭の隅に引っかかっていたのだ。
相手の言葉に無言で返すと、特に気にした風もなく、相手はさらりと答えた。
『そうだね、友達は何人か。あぁ、でも勘違いしないでね。今はそんなに交流がないんだ。なんといっても僕は引きこもりだから』
やはり、とでも言えばいいのだろうか。妙な取り繕いはあったものの、結論として、こいつには俺と違って友人がいる。
育った環境が違ったのか、出会ってきた人が違うのか、そもそも共通点が異常に多いだけの赤の他人なのか。何にせよ、俺とこいつには決定的な隔たりがある。ドッペルゲンガーだなんて、思い違いも甚だしかったのだ。
『そういう君もいるだろ？』
何も知らないこいつは、無神経に質問をしてくる。ほんの少しだけ苛立ちを覚えたが、こんなことでボロを出すわけにもいかない。
「まあ、な。何人かはいる」
『でしょ？　その人達とは今はどうなの？』
「……今は、あんまり。ほら、仕事で忙しいから、そんなに余裕が無くて」
『え？　家に招いたり、一緒に飲んだりとかは？』
「しないよ。夜勤だから、時間が中々合わないんだ。メールでちょっと連絡し合うぐらいさ」
『……本当に？』
何故だろう、この事にだけ必要以上に踏み込んでくる。最初に聞いたのは確かに俺だが、こんなに食いついてくるとは思わなかった。
「嘘ついてもしょうがないだろ。なんか引っかかってるみたいだけど」
『別に、そういうわけじゃないよ。少し気になっただけ』
普段と違って歯切れの悪い答え方だったが、特に気にすることはない。
階下で家の人間が起きる気配がしたため、適当に言い繕ってからマイクを切る。モニターにタオルケットを掛け直すと、もう一度ベッドに寝転がった。眠気が襲ってきたので、もう一度寝直すことにしたのだ。
「……友達、か」
俺がもう少しだけ、他人と接することに前向きになっていたなら、今よりもう少しだけましな生き方ができたのだろうか、などと意味のない思考を巡らせる。
友達の有無で人生の価値が決まるとは思っていない。だが、そういった人間関係から、選択肢も生まれたのではないだろうか。

少なくとも、こんな惨めな生き方はしなかったのではないだろうか。
「……」
天井を見上げる。真っ白な天井は、飾り気も無ければ味気もない。まるで鏡を見ているようだった。
モニター越しのあいつを思い出す。見た目や家族構成、好きなものや嫌いなもの、似ているものは例を挙げれば枚挙に暇がないほどだ。あれだけ似ている人間が、ただの赤の他人であるはずがない。
しかし、違う点も多々ある。それは生きていく上で、人格を作り上げるいくつかの要素だ。
例えば、言葉遣い。
例えば、細かな仕草。
例えば、友達の有無。
分かりやすいものから見落としがちなものまで、それは同一人物を別人にしてしまうには十分な要素ではないだろうか。
モニター同士が繋がって、あいつと話し、俺はあいつを自分自身だと思った。だが話せば話すほど、相手を知れば知るほど、自分から遠ざかっていく。モニター越しの奇妙な邂逅。これは、本当に『自分と向き合っている』と言えるのだろうか。
「……寝よう」
頭の痛くなるような思考から抜け出し、ゆっくりと瞼を閉じる。すんなりと眠りに落ちながらも、言い表せない不安から抜け出すことはできなかった。

◆◆◆

何時間寝ていたのだろうか。一階のリビングでは、夕食を食べながらの団欒が繰り広げられているらしい。同じ家に住んでいながら、俺は階段を隔てて仲間はずれだ。
ドアを開けると、そこには夕食があった。普段と比べると少しだけ豪華な食事を見て、そういえば今日は俺の誕生日だったことを思い出す。昔は家族三人でケーキを囲んでお祝いをしていたはずだが、今や見る影もない。
「誕生日おめでとう」の手紙が、お盆の上にある。言葉では聞いてもらえないと思ったのか、母はわざわざ書いたらしい。
夕食をもってモニターの前に座る。きっとアイツも一人で誕生日を祝っていることだろう。不思議ではあるが、お互いに自分の誕生日を祝うのも良いかもしれない。
「……？」
タオルケットをめくる。そこには同じ柄のタオルケットが広がっていた。どうやら向こうの俺はいないらしい。まさか無職の引きこもりが親と祝っているとも思えないし、もしかしたら

まだ寝ているのかもしれない。
取り敢えず先に夕食を食べながら待っていようと思ったその時、ヘッドホンから音が漏れていることに気がついた。
「マイク切り忘れてるのか？」
そう思ったが、普段とは何やら違う雰囲気だ。
騒がしい。それも物音や工事の音などではなく、人の笑い声のようなものが聞こえてくる。
不思議に思いながら、ヘッドホンを付けて向こうの様子を伺った。
ヘッドホンの音量を上げると、その騒がしさの正体はすぐにわかった。
『誕生日おめでとう！』
『おめでとう、植田君！』
『おーい、酒が足らねぇよ。次の開けてくれー』
『直也のお母さんの飯、マジでうめぇな！』
『誰だよ、ここにチーズ鱈置いた奴！　踏んじまったじゃねぇか！』
『一体誰だよ、こんなところにチーズ鱈持ってきた奴！』
楽しげな声が、ヘッドホンから流れてくる。笑い声や騒ぎ声、俺が今まで経験したことがない空気だった。
はじめは何が起こっているのか分からなかった。俺が寝ている間に別の人間のモニターに繋がったのではないかとも思った。しかし、その騒ぎの中には、間違いなく俺の名前が呼ばれている。
そしてその数人の声の中には、俺の、いや、モニターの向こうにいた『植田直也』の声が混ざっていた。
『今日はわざわざ、その、ありがとう』
『水臭ぇな、そんなの気にするなよ。同じ会社の同期じゃねぇか！』
『同期の割には仕事の量が全然違うけど？』
『うるせぇ！』
『植田は仕事できるからな、仕方ないよ』
『哀れむような目を向けるな！』
『ははは……』
言葉の意味が分からない。
会社？　同期？　仕事？　あいつは俺と同じ、無職の引きこもりじゃなかったのか？
そんな俺の疑問など置き去りにしたまま、向こうの宴会は盛り上がっていく。分かったことは、モニター越しに会話をしていたあいつも今日が誕生日だということ。そして今日あいつの部屋に集まっているのはあいつが通勤している会社の同期達で、誕生日を祝いに来ているということだった。

あり得ない。そんな言葉が延々と頭を巡っている。
あいつは本当に無職でも引きこもりでもないのだろうか。ならば何故わざわざあんな嘘をついたのだろうか。自分自身を貶めるような嘘を、自分からつく必要がどこにあるのだろうか。
どれだけ考えても答えは出ない。ただ、モニターの向こうの『植田直也』との違いを、まざまざと突きつけられたことだけは事実だ。
それ以上向こうの様子を聞いていられなかった。笑い声が、話し声が、ヘッドホンから聞こえてくる何もかもが、俺を傷つけていくのが耐えられなかった。あいつの楽しげな声を聞いているだけでおかしくなりそうだった。
そっとヘッドホンを外し、目の前の食事に目を向ける。あっちの『植田直也』とは違い、俺の誕生日を祝ってくれるのは母の作ってくれた食事だけだった。
「……美味い」
不思議と涙はでなかった。薄々勘づいてはいたのかもしれない。ただ、その勘が当たってしまったことに驚いただけだったのかもしれない。
少なくとも、モニター越しの『植田直也』は、俺とはまるで別人だった。

『もしもーし、聞こえてますかー？』
夕食を終えてから数時間後、家の人間は寝静まっている。ヘッドホンから漏れていた喧噪はいつの間にか無くなり、あいつが俺に呼びかける声だけが聞こえてくる。
『おーい、マイクから息づかい聞こえてるよ。いるんでしょ？』
そう言えばマイクのスイッチをいつのまにか入れていたのだった。迂闊といえば迂闊だった。そんなミスまで模倣してしまうあたり、あながち同一人物だというのも間違いじゃないかも知れないな、と自嘲気味に笑う。
『無視しないでよー、もしもーし』
無神経な声に腹が立つ。さっきの馬鹿騒ぎが、まさか聞かれていたなんて夢にも思っていないだろう。
そうだ、こいつも結局一緒だ。結局、俺を裏切ったんだ。
マイクの位置を正してから、モニターに掛かっているタオルケットを引きはがす。モニターの前で笑っていた顔が、俺の顔を見るなり曇る。余程ひどい顔をしているのだろう。
『……どうしたの？　嫌なことでもあった？』
元凶が口を開く。今までこいつと話して感じていた楽しさや、嬉しさや、その他諸々の感情が、今は真逆になって湧き上がる。
「……そんなに話がしたけりゃ、同僚と話してればいいだろうが」

『……へ？』
目を丸くしている。俺の言葉の意味が分からないらしい。
「全部聞こえてたよ。お前が同僚と騒いでるのが」
『あ……』
「引きこもりとか、無職だとか、全部嘘じゃねぇか！　そんな当てつけみたいな嘘つきやがって、俺のこと馬鹿にしてんのか！　酷い裏切りだ！」
『……』
相手は何も言い返さない。それを良いことに、俺は有らん限りの暴言を吐き続ける。その間も、あいつは俺に何も言わず、ただじっと見続けるだけだった。
言葉を吐き疲れ、荒い呼吸をするようになってから、俺に向かって口を開いた。
『さっき、当てつけって言ってたけど、もしかして君は……』
口を滑らせた。しかし、もうこうなってしまっては隠し通すつもりもない。モニターに目を向けるが、あいつは相変わらず穏やかな顔のままで、問い詰めるような視線ではない。その落ち着きが、余計に腹立たしかった。
「ああ、そうだよ。無職で引きこもりは俺のほうだ。俺もずっと……」
そこで、はたと気がつく。いや、どうして今までこんな簡単な事に気がつかなかったのだろうか。散々嘘をついたことを責め立てていた俺はなんなのか。酷い裏切りだ、なんて、とんだお笑い種だ。

――俺もずっと、こいつのことを裏切っているじゃないか。

最初に嘘をついたのは俺だ。裏切っていたのは俺のほうだった。自分のことを棚に上げて、相手に罵詈雑言をはき続けていたのだ。最低なのは俺の方だった。
今更自分の過ちに気付いた俺に、モニターの向こうのそいつは、控えめに口を開いた。
『……ごめん』
謝った。俺が嘘をついていることも、俺の言葉の矛盾も分かっているはずだ。それでも、それを分かっていながらも、あいつは俺に謝ったのだ。まず俺が謝らなければいけないのに。
『モニターが繋がって、自分自身と向き合っているんだな、と思った時、自分に自信がなくなったんだ。今まで人や雰囲気に流され続けてきて、今の仕事だってみんなが良い会社だっていうのを聞いて決めたし、仲の良い人間も、拒絶されたくなくて合わせていただけだった』
俺は周りの人や雰囲気を見るのが嫌だった。馬鹿にされるのではないか、拒絶されるのではないかとずっと不安で、結局そこから逃げ出した。価値がないと言われるのではないかと社会から逃げ、人から逃げていたのだ。
『期待されてるって周りは言うけど、結局それってプレッシャーが大きいだけで、人よりも評

価が厳しくなるだけだ。人付き合いだって、相手の顔を見ながら、機嫌を悪くさせないように振る舞って、自分自身が疲れるだけ。そんな風に考えている自分に嫌気が差したんだ』

結局期待などされることもなく、時間が経てば経つほど自分を卑下するようになっていった。ネットで大きな顔をしていても、結局は人付き合いなんてまともに出来なかった。自分に都合の良い人間を周りに侍らせていただけ。そんな風に行動する自分がどうしようもなく嫌いだった。

『でも、ここでなら、モニター越しでしか会話をしない君に対してだけなら、自分の好きな自分自身でいられると思った。プレッシャーなんてなくて、値踏みもされない、誰かの顔色を気にする必要もない自分。それが僕の憧れだった』

モニター越しであれば嘘なんてばれはしない。そう思って都合の良い自分自身を作り出したのだ。周りの人間に信頼され、大きな評価をもらい、誰かと繋がりを持っている自分。それが俺の理想だった。

発端は何もかも一緒で、思い描いたのは全てが真逆。社会に生き、人と接するからこそ、そこから離れたかったこいつと、社会から外れ、人と繋がらないからこそ、そこへ入りたかった俺。

今の自分に自信を持てなかった。今の自分から変わりたかった。それは極端で、荒唐無稽で、あまりにもかけ離れた自分自身。俺たちが思い描いた、理想とする『自分』。この数日間、俺たちは理想の『自分』とずっと『向き合っていた』のだ。

「あぁ、なんてことはなかったんだな」

――俺たちはずっと、画面越しに騙る、画面の向こうの自分自身に憧れていたのだ。

「こんなところは似てるんだな」

自嘲気味に笑う俺。

『いろんなところが違うのにね』

自嘲気味に笑う彼。

言葉遣いの違いも、仕事の有無も、友達の有無も、どれも些細な違いでしかない。俺もこいつも、心の底に根ざしているものは一緒だった。

変わりたい。ただ、今の自分を変えたい。ただそれだけのことだった。

それでも、変わることはとてもエネルギーのいる行為だ。ほんの少し考え方を変えたりするだけでも、とてつもない労力が必要になる。理想の自分を作り上げて、その目標に到達するには、膨大な時間と多大な努力がいる。それを持続し続けることは、とても辛く厳しいものだと思う。

だからこそ、語るだけで理想に近付けることは、例え自分自身さえ騙す行為であってもとて

も魅力的だった。モニター越し、という環境は、まさにうってつけだった。
でも、それでは駄目だ。努力無くして人は変われない。ただ言葉にするだけで理想の自分にはなれないのだ。そんな簡単なことを、二人揃って見失っていたのかも知れない。
「悪かったな、ずっと騙して。俺もお前と同じで、自分に自信が持てなかった。今思えばおかしな話だよな。自分自身に拒絶されるのが怖かったなんて」
俺はずっと、言葉や態度で自分を騙して、それでも心の奥では両親に対する罪悪感が拭いきれなかった。自分自身に拒絶されるのが怖かったのは、ずっと自分が拒絶されるようなことをしていると気付いていたからだ。
『僕も一緒だよ。ずっと君を騙してた。こんな自分だなんて知られるのが怖かったんだ。今まで確たる自分を持ったことすらなかったのにね』
決断を迫られる度に、周りに流され、他人に合わせてやり過ごしていたこいつは、そんな自分を変えたかったのだろう。社会に迎合することなく、他人との繋がりを絶つ、という極端な結論に至ってしまったが、そうして追い込むことで、確固たる自分自身を作り出したかったのだろう。
「だからって引きこもりはないけどな」
『君にだけは言われたくないよ』
「……確かになぁ」
笑い合う。自分の笑い顔というのも奇妙なものだが、もう嫌悪感は微塵もなかった。こうやってこいつと笑い合えることが、何より嬉しかった。
「俺、外にでるよ。きちんと職にも就く。……まあ、水曜休みの夜勤じゃないだろうけどな」
『僕も、もう少し自分を出せるようにするよ。自分自身の意見をしっかり持ちたい』
「だからって『うるせぇ、ババア』は言わない方がいいぞ」
『君、そんな漫画みたいな引きこもりしてたの？』
自分をさらけ出して、余計な自尊心を捨てて、そこには邪魔するものはなにもない。モニター越しであろうと、俺とこいつを隔てるものは何もない。
理想の自分とはほど遠いけれど。
恥ずかしいこともたくさんあるけれど。
それでも、心の繋がりが、確かにここにある。
俺にとっては初めての、心から通い合える、本物の『友人』だった。
「よし、明日から本気出すぞ！」
『僕の経験からだけど、その言葉を口にして本当に本気出した人はいないよ』
「じゃあ見てろよ！　俺が第一人者になってやるよ！」
『ははは、そうだね、楽しみにしてるよ』
自分自身からの応援だ。これ以上頼もしいものはない。なんと言っても、一番自分のことを

理解している人間なのだから。
「……明日も、会えるよな」
最後の確認。今まで嘘をついていた自分を許してくれるのか、こんな自分でも、また会いに来てくれるのか、という、祈りにも似た質問だった。
その質問に、何でもないように、それでもしっかりとした答えが返ってくる。
『……そうだね。また会おう』
最初は奇妙なだけのこのモニター越しの関係は、いつ終わるとも知れないが、それでも、続いていく限りは大切にしていこう。
俺を、俺たちを、確かに変えてくれたのだから。
「それじゃ、また明日」
『ああ。また明日』
そう告げると、モニターにタオルケットを掛け、マイクのスイッチを切った。明日からの忙しい日々を思いながら、逃げ出したい気持ちになる。
「……分かってるさ、逃げないよ」
今まで逃げてきたのだ。これからは絶対に逃げない。それが俺の、これから生きていく道なのだから。

◆◆◆

四月。厳しかった冬の寒さは、春の麗らかさへと様変わりし、桜の花が街を彩るように咲き誇る頃。
世間の人々は年度の始まりとあってか、新しい生活の準備に追われて忙しない日々を送っている。新しい学校への期待と不安に胸を膨らませる人、社会人としての第一歩を踏み出そうとしている人、他にも様々な思いが巡っているだろう。十人十色、人の数だけ期待があり、人の数だけ希望がある。
穏やかな日差しと暖かな空気。春という季節は、まさに新しく巡る日々へ思いを馳せるに相応しい季節と言えるだろう。
「はぁ、疲れた」
頭の上にはソメイヨシノ。目で見えるほどはっきりと分かる麗らかな日差し。そんな春の陽気を、しっかりと肌で感じている。
桜の樹にもたれかかる。今日は社員総出でお花見であり、一番下っ端の俺が花見の場所取りをさせられているのだ。日が昇る前から電車に揺られ、会社近くの公園で良い場所を取らなければならなかった。
そのせいか睡眠時間は短く、麗らかな日差しにやられてうっかり船を漕いでしまいそうだ。

小腹も空いてきて、いよいよ体が限界かもしれない。
「おっと、そうだった」
ふと思い出した俺は、鞄の中に入っているおにぎりを取り出した。
朝ご飯を食べる余裕がないと母に伝えた時、出先で食べられるようにと作ってくれたものだ。海苔も具もないシンプルなものだが、こうして小腹を満たしてくれるのだからありがたい。そんなおにぎりを食べながら、あの日のことを思い起こしていた。
モニターの向こうのあいつと約束を交わした次の日、俺は部屋を出て、家族のいるリビングへと向かった。今までのことを謝り、これから頑張って就職すると伝えると、父も母も涙を流して喜んでいた。こんな簡単に喜ばせられるのならば、もっと早くしていれば良かったと、後悔したのを覚えている。
それから、まずはリハビリだと、近所でアルバイトを始めた。そうして少しでも生活費をいれて、今までの恩返しをしようと思ったのだ。
そして去年の春、書類審査で何社も落ち、面接でさらに落とされながらも、最後の最後で、俺を雇ってくれる会社と出会うことが出来た。小さな会社で社員も少ないながら、慎ましく仕事を続けている。
これまでの無職の経歴にも関わらず、やる気を認めて雇ってくれた会社のために、必死に働いてきた。勿論上司から多大な期待をされるわけもなければ、仕事が出来る人間になれてもいない。それでも、良い同僚と良い上司に恵まれ、もうすぐ二年目を迎えようとしている。
この喜びを、あいつに伝えられないことだけが心残りだった。
また明日、と別れた翌日、パソコンとモニターが復旧し、以前のように機能するようになった。今でもしっかりとネットに繋げられるし、メールだけでなく音声のチャットも機能している。
それでも、俺の見たかった映像を映すこともなければ、俺の聞きたかった声を流すこともなかった。あの広告もあれ以来出てこない。必死にネット中を巡って探したこともあったが、結局見つからなかった。
あいつと話していた証拠はどこにも残っていない。モニター越しでしか会えなかったのだから、何か物が残るはずもない。
しかし、今の俺は、あの出来事があったからこそいるのだ。俺自身が、証拠と言っても過言ではない。
今にして思えば、あいつはドッペルゲンガーだったのかもしれない。現に、あいつと出会って、俺は一度死んだのだ。
自分の部屋だけが世界の全てのように思いこみ、閉じこもっていた、矮小な植田直也は、ものの見事に消えて無くなった。あの頃の愚かな俺は、モニターの向こうのあいつが、確かに殺してくれたのだ。

「ああ、綺麗な桜だな……」
以前は窓を隔ててしか見ていなかった桜が、今は目の前にある。手を伸ばせば届く距離まで、俺は近づくことが出来たのだ。

本日は快晴、透き通るような青い空の中を、白い雲がのんびりと泳いでいる。穏やかな風は花びらを散らすことなく、踊らせるように鮮やかな桜を揺らしている。
絶好のお花見日和。穏やかな春の中、一人、静かに君を思う。
モニター越しの君も、同じ桜を見ているのだろうか――

終